

東京農業大学稲花小学校

学校だより【2021年9月27日】第96号



稲穂を持ち帰りました

農大稲花小の稲刈り、今年は残念ながら中止となりましたが、9月17日(金)に東京農業大学農芸化学科の加藤拓准教授と大学院生の皆さんが親切に稲束を届けてくださいました。そして、9月20日(月)に1年生と2年生の子どもたちは、稲穂を自宅に持ち帰りました。また、図画工作の授業では稲穂を題材に素敵な絵も描きました。本校の名前「稲花」にもあるように、稲は本校の学びの柱の一つでもあります。子どもたちの持ち帰った稲穂を、ご家庭でも大切にさせていただきますようお願いします。



様々なゲストティーチャー

農大稲花小は「冒険心の育成」を教育理念に、教育を行っています。文部科学省が定めた「学習指導要領」に基づいた教育を行うとともに、農大稲花小としての特色ある教育を行うことにより、「未知なる新しい世界に挑む気骨と主体性をもち、本気になって取り組み、科学的・実践的に学ぶ人間」を育てようとしているのです。その中には、東京農業大学の多様な教育資源を生かした授業も含まれています。

9月24日(金)は、東京農業大学から3人の先生をゲストティーチャーとしてお迎えしての授業が行われました。

1年生の稲花タイムでは、東京農業大学造園科学科の金澤弓子准教授が、秋の種まきの指導をされました。草の花や木の花、花の色の様々、心を楽しませるために花を育てることなど、様々な視点で花について学んだあと、プランターに、菜の花、ネモフィラ、ヤグルマソウ、そしてキンセンカの種を播きました。中心には背の高くなる植物、周りにそれよりも背の低い植物を植えることなども教えていただき、子どもたちは真剣に種まきをしていました。

金澤 弓子 准教授 造園・樹木園芸学研究室

<https://www.nodai.ac.jp/academics/reg/land/lab/1207/>

2年生の理科では、東京農業大学国際農業開発学科のパチャキル バビル准教授に、イモの話と題して授業をしていただきました。ジャガイモだけでなくいろいろなイモの原産地、様々な品種、どの部分を食べるのかなどを学んでいきます。アフリカでは主食とされるサツマイモが甘くないということを知り、なぜだろうと不思議そうな顔をする子どもたちでしたが、毎日食べる主食は甘いと言ってしまうという答えに、納得の様子でした。メリハリのある先生の授業に、子どもたちの集中力は途切れることはありませんでした。

パチャキル バビル 准教授 熱帯作物学研究室

<https://www.nodai.ac.jp/academics/int/int/lab/1301/>

3年生は、東京農業大学富士農場の家畜や家禽について、東京農業大学副学長で動物科学科教授の桑山岳人先生に授業をしていただきました。新型コロナウイルスの影響で、富士農場で予定していた宿泊学習が実施できなかった3年生ですが、農場の役割や様々な家畜・家禽について学んだ子どもたちは、富士農場に行きたい！ という気持ちが強くなったようです。卵をたくさん産むけれど子育てに熱心でない白色レグホンと卵を少し生んで大切に育てる野鶉の交配によってできた、見た目は白色レグホンだが子育てに熱心で卵を必死に守ろうとするニワトリのビデオや、12kgくらいの圧をかけても割れないホロホロチョウの卵のビデオに、子どもたちは見入っていました。一人4個ずつ自宅に持ち帰ったホロホロチョウの卵を囲んで、家族とも話が弾んだものと思います。



桑山 岳人 教授 動物生殖学研究室

<https://www.nodai.ac.jp/academics/agri/zoo/lab/301/>

毎日の授業できちんと学び必要な学力をつけるとともに、ゲストティーチャーの授業によりその幅を広げ、子どもたちの心に学びが定着することを期待しています。

学びを定着させる生活へ

文字を正しく書くこと、計算が正しくできることなどは、すべての学習に求められる基礎的な力です。自動的に身につくものではなく、教室での学習に加えて、習熟するまで自分で家庭でも練習することが必要でしょう。文字や計算だけでなく、学年が進むにつれて習うことは多くなり、習熟すべきこと、自分で復習すべきことも多くなってきます。自分のわかっていないところ、できていないところを発見し、それを自分で補う家庭学習が大切になります。低学年の間は、自分から勉強する習慣をつけるために、保護者の皆様のお手伝いが必要です。中学年では、保護者の手助けが少なくても、自分で勉強する習慣がほぼできあがってくるというのが望ましいところですね。本校の最上級生である3年生の子どもたちも、そのような習慣ができてくる時期でしょう。

農大稲花小では教育の指標「10の能力」を身に付けること最も重視し評価しています。「冒険心」をもって子どもたちが卒業できることを目指しているからです。しかし、「冒険心」を具現化するためには学習による知識や技能の定着も必要になります。俗にも「よく学び、よく遊べ」といわれますが、「よく学び、よく体験し、よく遊べ……」と、農大稲花小の子どもたちは毎日、よくがんばっているといえます。

私学教育の重要性

9月25日(土)に、東京私立中学高等学校協会第8支部、私立初等学校協会他が主催する「令和3年度私学振興拡充支部大会」に出席しました。都内にある56校の私立小学校で学ぶ児童数は小学生総数の4.4%ですが、私立中学校の生徒は約25%、私立高等学校の生徒は約60%と、私立学校が日本の教育に果たしている役割は大きいのです。世田谷区、目黒区、および町田市の一部の私立学校から170名を超える教職員や保護者が参加したこの大会では、とくに保護者の皆様が負担される教育費の公私間格差の是正について、令和4年度「私学振興予算等」に関する要望を決議しました。

本校においても教育の理念に基づき、特色ある教育を実践しています。困難の多い今こそ、未来を見据えた教育が大切です。農大稲花小ではこれからも保護者の皆様と一体となって、子どもたちの教育に取り組んでまいります。

校長 夏秋 啓子